

庵主 智圓禅尼 (女性のお坊さん) 物語

天保六年(一八三五)のことでした。出作の長五郎さんの家では、かわいい女の子が生まれました。親類や近所のおばさんたちがやってきては、

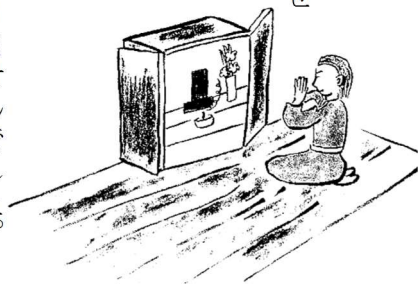
「ま、かわいいやさしそうな赤ちゃんだこと。」

とお産見舞いを言って帰りました。長五郎さんにとって三人目の女の子です。どうかやさしい賢い子に育ちますようにと「チエ」と名づけました。チエは、家族に見守られてすくすくと育ちました。

このころ、百姓の生活は決して楽な暮らしではありませんでした。朝は暗いときに起き、夕方日が暮れるまで田畑で働き、夜、男は縄をなったりむしろをおったり、女は着物のつくり、食事の準備、そのほかいろいろと夜遅くまで働きました。子どももおとなたちを助けて働きました。でも、働けど働けどいっこうに暮らしはよくなりません。厳しい時代でした。

チエは、朝早く起きて母を助け、すいじをしたり、うらの庭から花を切ってきて、仏様にそなえたりせさせと働きました。決して豊かな生活とは言えないけれど、チエは家族といっしょに助け合いながらくらせることに感謝していました。しかし、いつまでもその暮らしは続きませんでした。長い苦労つづきの生活のため

め父母はあいついでたおれ、子どもたちがけんめいに看病したかいもなく死んでいきました。チエは毎日のように父母をまつる仏壇の前で手を合わせ冥福を祈り続けました。でも、その悲しみはきえることはありませんでした。



となりむら くにたむら  
隣村（柞田村）の善正寺には、えらい和尚さんがおいでになると聞いて、ある日、お参りし、心のうちを聞いていただきました。

和尚さんは、

「あなたの気持ちはよく分かった。いつまでも嘆き悲しんでいてはなりません。いつそう仏の道に入り、修行してご両親をお慰めしてはどうか。」

とのことでした。そこで、和尚さんの言われるように仏門に入り、このえらい和尚さんに教えをいただき、修行して、立派な尼さんになろうと決心しました。さつそく、兄や姉に打ち明け、善正寺に移り住みました。

これは嘉永六年（一八五三）数え十九歳のときでした。この日から、いよいよチエの修行が始まりました。朝早く起きて炊事、洗濯、本堂・庫裡・庭の掃除、朝の勤行、そして夕べの勤行、夜の講義と厳しい修行の毎日でした。チエは苦しさに負けず、一心不乱（いつしようにけんめい）修行に努めました。和尚さんはチエの修行ぶりに感心し、うれしゅう思っていました。もちろん、お寺にお参りに来た人たちも感心し、ほめたたえました。このことは人から人へと伝わり、お寺へお参りする人がだんだんとふえてきたそうです。

そして、チエは認められて智円禅尼と名乗り一人前の尼さんとして修行を続けました。智円禅尼は人々から智円さんと呼ばれ里人から親しまれました。

智円禅尼が修行を始めてから七年目、万延元年（一八六〇）の春、隣村（青岡）の庄屋さん（真鍋常七）がひよっこり善正寺にやって来て、紅梅の花がさく縁側で、和尚さんとあつたかいお茶を飲みながら、ぽつりぽつりとよもやま話をしていました。



「ときに、和尚さん、ご存知の由緒ある青岡のお庵の庵主が先年なくなりましてな。村人も寂しがつているんじや。どなたか庵主に来てくれる方はおらんのかのう。ひとつ、和尚さんにお世話をお願いしたいと思つてなあ。」

「それはお困りじやのう。誰かいい方はいないかのう。心にかけて捜してしんぜましよう。」

「どうぞよいお返事がいただけますよう祈つております。では。」

と庄屋さんは安心して帰りました。

数日後のことでした。智田さんが本堂のお掃除をしているとき、お参りに来たおばあさんたちが

「なんでも、青岡の庄屋さんに頼まれて、和尚さんが青岡の地藏庵の庵主さんを捜しているそうな……」

と話しているのが聞こえてきました。そのときは別に気にかけませんでしたが、夕べのお勤めが終わり、

「お休みなさい。」

と和尚さんにご挨拶をして床につきました。物音一つしない静まり返った真つ暗な部屋にかすかに柞田川の水の流れらしい音がしました。柞田川に水が出たのかしらなどと思つているとき、ふと、あのおばあさんたちのお話 생각이出され、眠れませんでした。

翌朝、お勤めがすんだ後、

「和尚さん、昨日お参りのおばさんたちが、青岡の庵の庵主を捜しておいでとか話していましたが……。」

「うん、先日庄屋さんが来てのう、あそこの庵主さんを……と頼まれたんじや。誰かいつてくれる人はおらんかのう。青岡村の人たちはさみしがつているそうな……。」

「和尚さん、わたし、夕べから考えていたんだけど、決心しました。和尚さんのお許しがあれば、お勤めしたいと思ひます。」

「えっ、おまえが行ってくれるのかい。庄屋さんはさぞ喜んでくれることだろう。さっそく、話を進めてみましょう。」  
それから数日後、庄屋さんから

「村人が大喜びして、みんなで大掃除をして待っている。来てくださる日が決まりましたら、こちらからお迎えにまいります。」との返事でした。智円さんはうれしいうちやちよっぴり不安で胸がいっぱいでした。月日のたつのは早いもので、忙しいお盆の行事も終わり、いよいよその日がやってきました。ご本尊にお参りし、和尚さんにご挨拶をすませた智円さんは、青岡から来た出迎えの男衆に風呂敷包みの荷物をお願いして、山門を出ました。七年間お世話になったお寺、思い出のつまった寺を出ていく智円さんの目には涙があふれていました。時に、蔓延元年七月、智円さん二五歳のときでした。

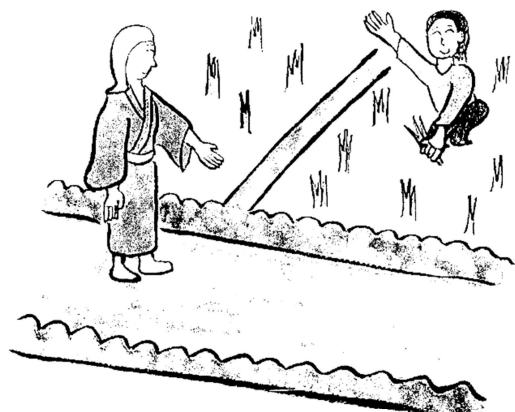
青岡に入ると、あちこちで野良仕事をしていた村人が手を振って迎えてくれました。庵の前には庄屋さんをはじめ村人たちが優しい笑顔で迎えてくれました。村人たちの温かい心にふれ、智円さんの笑みをうかべた

瞳はうれし涙で光っていました。その夕方、おおぜいの村人が集まり、智円庵主の先導でお念仏が唱えられ、引き続き庄屋が用意した食事をして、新庵主さんを歓迎しました。翌日から朝・夕のお勤め・墓地の清掃をはじめ、遊びにやってくる子どもたちの世話、お参りに来た人たちのお接待と忙しい毎日でした。村人は智円さんの活躍ぶりを見逃しませんでした。そして、

「今朝取ってきたカボチャひとつどうぞ。」

「今日はおうるい（雨）休みでなあ、おはぎを作ったんじや。」

などと田畑でできた野菜や果物、自宅で作ったものなどを持ってきてくれました。



亡なくなりました。



また、智ち田えんさんは子こども好ずきでした。村むらの子こどもたちも優やさしい智ち田えんさんによよくなつつきました。このこ

ろはどこの家いえも子こ沢たく山さんで四・五ご人にんの子こどもがいました。小ちさい子こをおんぶぶして左さ右ゆうに弟てい妹まいの手てをととつてや

つてくるありさまは珍めづしくありませせんでした。農のう繁はん期き（田たんぼぼの忙いそがしい時とき期き）にもななれば、日ひ頃ころたくさん

来きていたううえにさららに増ふえ、まるまで今いま頃ころの幼よう稚ち園えんや保ほ育いく所じょのようようで、庵あんの前まえの広ひろ場ばは子こどももでああふれれんば

かりでああつたつそううです。智ち田えんさんは、いいつつも子こどもの相あ手てにななりながら見み守まもつつていいました。子こどもらは、

少すしお腹なかがすいたころ頃ころ、お供そなえ物ものやもらいもののお菓かし子しなどを智ち田えんさんからちようようだだいいして大お喜よろこびでした。

秋あきには、広ひろ場ばの柿かきの木きに実みがたくさんなりなりました。熟じゆくした柿かき、洗し拔はきした柿かき、干ほした柿かき、みみんな子こどもらにふるまいまいました。

子こどもらは、庵あんに来るのが大きな楽たのしみでした。また、村むら休やすみの日ひには、娘むすめたちはお花はなを習いに、若わか者ものは力石ちからいしを競いにやつて来

ました。年とし寄よりは、縁えん側がわに腰こしをおろし、智ち田えんさんが出だしてくれたお茶ちやをすすりながら、よよももやま話はなしを楽しんだり、子こどもも相あ手てに

昔むかし話はなしに花はなを咲かせていいました。秋あき祭まつりには、若わか衆しゆうが獅子し舞まいを奉納ほうのうに来るなど村むらの文ぶん化かの中ちゆう心しんでした。

しかし、明めい治じ三さん十じゆ年ねんこころ、村むら人びとに見守まもられながら静しずかに息いきをひきとつたといいます。私わたしの父ちち（明めい治じ

十五じゆうご年ねん生まれ）は、生せい家かが庵の近くでもあり、幼おいさなとき、朝ちやう食じやくがすむと庵あんへ飛んでいつたそうです。そ

して、智ち田えんさんに

「ようよう来きた、ようよう来きた。」

と、わが子このようようにかかわいがられたと墓はか参まいりのたびに話はなしをしていいました。その父ちちもとつくに



今では、智田さんのこと、子どもらのことをじいっと見詰め、見守ってきた庵のこの柿の木だけが知っています。よく茂り、毎年  
たくさんの実をつけてきたこの柿の木は、今一抱えほどの大木になっています。でも、庵主もいない、子どもたちもない庵の庭  
に、昔のことを語る人もなく、寂しく立っていました。長い年月がたち、伸びすぎて屋根を傷めるからといっては枝を切られ、葉  
や実が落ちて汚れるから、切り倒そうという話もでしたが、倒されることなく数年が経ちました。しかし、庵の傷みが激しく  
なり、修繕では間に合わず、古いのを壊し建て直すことになりました。その際、柿木も庵と一緒になくなってしまいました。哀れ  
な話です。



〈真鍋和三〉

〈観音寺の民話・昔話より〉